

◆大シンポジウム「世界史教育のなかのアメリカ史」

2006年のいわゆる世界史未履修問題がよびおこした懸念のひとつは、歴史教育の空洞化であった。教室において、歴史はしばしば受験のための暗記作業とみなされ、世界を理解し世界に関与するための知とは受けとめられていないというのである。

こうした事例は、歴史学的思考とは何かを再検討され提示され直すべきことを示唆していよう。狭義の教育現場にとってのみならず、歴史の探求が過去についての情報以上の何なのかが、問われているからだ。そして、大学や高校の教室は、その歴史学的な思考の実践と検討の場として中心的であるに違いない。当シンポジウムが、歴史教育を討議の中心に所以である。南北アメリカ史研究の成果を教育の現場にいかにか「下ろすか」といったノウハウ論にとどまらず、制度、思想、そして現場での試みといった多角的視点から検討を加えたい。このシンポジウムが、歴史教育をめぐる課題について当学会が継続的に取り組むための出発点になるのを祈念している。

(運営委員会 担当：松原宏之)